

ダビンチプログラムの高大トランジション面における検証

—入試と入学前教育の機能設計に着目して—

山本以和子（京都工芸繊維大学）

ダビンチ入試と入学前教育を合わせて称する「ダビンチプログラム」は、高大トランジションに対してどこまで進行できているかを現在のAO入試の課題と大学進学レディネスの概念とを照合しながらデータを基に検証を行った。その結果、入学後の学習に関わる行動特性として、プレースメントテストの上昇、中退予備軍の少なさ、入学後の取得単位数の多さ、入学前教育の積極的な参加、教員とのコミュニケーションの高さや授業に臨む姿勢の良さなどが明らかになった。この結果を高大接続の概念モデルで考察したところ、ダビンチプログラムは高大接続（Articulation）というより、高大移行（Transition）の機能を持っていると考えられる。

1 はじめに

本学のダビンチ入試は、1999年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」に呼応して、2002年度より学生募集を始め、導入当初から合格者のプレースメントテスト、入学前教育を行ってきた。その当時、高校教育の変化や高校生の学習歴の多様化、学習力の低下、自己理解と主体性の低下が課題であった。これらの課題をAO入試のような学習目的や意欲・思考力という教科学力以外の面を判定することで解決しようとしたのである。しかし、AO入試導入後の現在は、基礎的教科学力を見ない新たな入試の出現により、一般入試の学生より大学入学後の成績が悪い、高校時代の学習時間が少ない、学習姿勢ができていないといったAO入試合格者の学力についての課題と、また知識量のみを問う入試合格を動機とした対策型学習ができないという高校側からの批判、さらに早期合格者の学習モチベーションの維持など合格後の学習継続の難しさなどが課題に取り上げられている¹。

ここでは、これらの課題についてダビンチプログラムはどのような状況であるのかを検証する。AO入試合格者の学力問題では、合格当時に課すプレースメントテストの結果や進学後の学習パフォーマンスのデータを用いる。次に知識偏重型の入試対策学習への対処として、学業遂行能力を見るテストに対する意見を集約、また早期合格者の対応については入学前教育の実施データで各々検証を行う。さらに、ダビンチプログラムが高大トランジションの機能段階においてどの位置にあるかを考察する。

2 ダビンチプログラム（入試と入学前教育）の概要

ダビンチ入試の内容設計は次のようになる。選考は書類審査とスクーリング(課題提示・レポート、講義・レポート)の第1次選考と適性審査の最終選考の2段階である。大学に修学できる基礎学力を持ち、入学を強く志望する者を出願要件として、第1次選考は、アドミッションセンターで推薦した志願者を学部にて合否判定していた。最終選考では、製作、実習、発表、ディベート、レポート、面接を各学科で課して全体活動を通した合否判定をしている。

開設当初のダビンチ入試の設計は当時の文献²によると、通常の個別学力試験よりも「多様な能力・資質を必要とする」入試であること、選考の内容そのものが一つの教育プログラムになっていること、高校・受験産業側でAO入試の対策ができない内容であることが方針であった。テスト自体も論述が多く、また講義、グループディスカッション、実験、製作課題と多様な授業ツールを用いた。さらにセンター試験の高得点層でもこれらの課題をこなすには難しいと考えられるテスト形式を開発した。加えて、教科学力試験だけでなくある程度のリーダーシップ、クリエイティブ能力等の資質・適性をもった学生の獲得を目指した。

一方、入学前教育は、ダビンチ入試合格後の約4ヶ月間をどのように過ごさせるかを高校と討議を行い、入学前教育を導入した。その目的には、学習の継続と大学教育への接続、入学後の学習に向けた指導や動機付け、高校連携を意図し、高校の学習指導を側面支援することが挙げられた³。オリエンテーション、プレースメントテスト、添削学習課題（文章表現・数学・物理・英語）、学習・生活相談会を実施した。

3 高大トランジション構造の考察

3.1 先行研究による高大移行期の概念

日本の高大接続に関する研究は、中村（2010）⁴によると、「戦前から続いてきたものであるが、現代における「高校と大学の接続」の問題はそれまでより社会的注目度が高くなっている」とある。1990年代の大学の大量化と高校教育の進学率の高まりは、高校教育と大学教育の様相を変え、また入学者選抜システムの学力の質担保の課題が生じた。この問題に入試制度から取り組んだのが荒井（1998,2000,2002,2005）⁵の研究である。そこでは、高校と大学の接続が選抜から教育への転換を予測し、米国のリメディアル教育の研究と、学習能力の多様化とその評価が提示された。

一方、高校教育と大学教育の乖離に注目したのが山田（2000,2001,2003,2004,2005）⁶である。米国の一年次教育を日本に導入し、米国のユニバーサル化現象を背景とした大学中退率を下げる大学進学レディネスの開発を紹介した。その頃は日本においても高校段階までの「ゆとり教育」を受けた学生を迎え入れることで、どのような準備教育が大学で必要かを問われている時代であった。

その後、日本ではこの入試システムとリメディアル教育、初年次教育が交錯し、高大接続の問題が議論されるようになる。入学者選抜システムについては、AO入試の拡大と共に高校教育の学力保証が課題となり、選抜方法と入学後の学業成績の違いを追跡し、多種多様な選抜方法の検証が行われるようになる。また、初年次教育はリメディアル教育や入学前教育が包含され、大学進学準備教育としての方法論が追及されるようになる。しかし、入試と関連させた初年次教育の追跡研究や事例研究は管見の限り見あたらない。中村（2010）が「高大接続論があまりに普及しすぎた結果、様々なテーマに関して「高大接続」のタイトルが銘打たれており、議論にやや混乱をもたらしているように見受けられる」と述べているように、何をゴールにした「高大接続」なのかが不明確になっている。

3.2 高大接続と高大移行のちがい（高大トランジションの構造モデルの提示）

現行の高大接続システムでは、学生たちの高等学校から大学への移行がスムーズに行われたいという認識が大学にある。学生たちは、高等学校教育を受けて入学者選抜を通過したにも関わらず、大学の教育に十分についていけないケースが散見される。本来なら大学進学準備ができていて、すなわち大学での教育にスムーズに移行できる新入生となっているはずである。し

かし、大学教育を受ける確かな目的がない学生や入学1年目で大学の現実に衝撃を受け、やる気をなくす学生、こんなはずじゃなかったと自己を変えようとせずかたくなになったり、傷ついたりする学生が結局大学を中途退学する。大学1年次の中退率が他の学年よりも高いのは、この目標が達成できていないもしくは移行過程で問題が生じていることが原因である。そのような学生が出現しないよう「大学進学レディネスをどのように判定し、またそれが不足の場合はどのように形成するか」という視点も現在の高大移行には必要であると考えられる。

これらをふまえて、高大接続と高大移行という言葉について整理をしたい。図1で示すように高大接続は、海外では「Articulation」と訳される。これは継目・接合を意味し、接木など異質のものを繋げるときに使う。このことから高等学校と大学は異質であり、機能するように繋げるということを表しているのがわかる。これまでは、その「接ぐ」の時点でどのような入試方法がよいのかという制度的な接ぎ方として捉えられてきた。だから、日本や韓国のように「ふるいにかける」という発想が高大移行期にはあり、高校生から同じ状態のままふるいにかければ大学で成果が出せるという考えが存在してきた。しかし、ふるい対象のレベルにより、質は変動する。これは「つなぐ」場合も同様で、高校生の状況が悪ければ大学生にはなれず、「接いだ」後にしっかり成長を促さなければ「接ぐ」ことはできない。



図1. 高大トランジションの構造モデル

高校生から大学生へ変身させる、というような異質なものを「機能するように繋げ」て、「新たなステージで定着できるよう変化させる」ところまでを指すなら、「高大移行(Transition)」である。「Transition」には、移行や転移、変化といった意味があり、もともとの姿から次の姿へ変化する「変わり目」を指す。「高校生から大学生になる」という見方をすると、現在の高大接続で求められているのは、「Articulation」ではなく、「Transition」であると言える。

3 検証

3.1 プレースメントテストの結果推移

本学では、最終合格発表後のオリエンテーションで英語と数学のプレースメントテストを行っている。導入当初から同じ問題を利用しており、また問題用紙・解答用紙もその場で回収し、問題が外部に漏れることのないように配慮している。ダビンチ入試合格者におけるオリエンテーションの参加率は、ほぼ毎年 100% である。図 2 は、ダビンチ入試導入開始年度より現在に至るまでの英語と数学のプレースメントテストの平均点の推移を表したグラフである。この結果から年度により上昇下降はみられるものの、実施後 16 年間で英語の平均点は 12 点、数学は 15 点上昇していることがわかる。

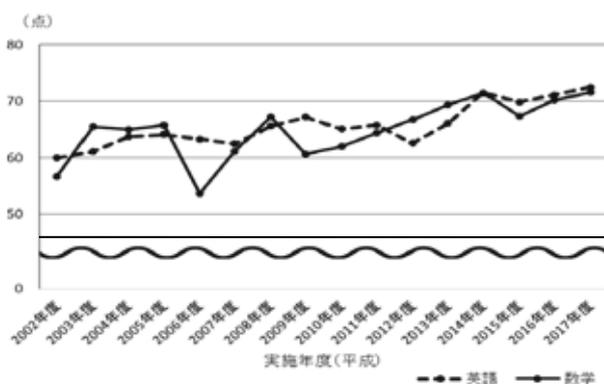


図 2. プレースメントテストの平均点の推移

3.2 大学進学後の成績

本学の主な入学者選抜は、ダビンチ入試、一般入試前期日程、後期日程である。ここでは、これらの入試類型での合格者の入学後の成績を比較してみる。検証手順は、まず学部卒業年度の 4 年生後期の期末テストの成績を基に平成 14～23 年度の 10 年間分の学科・課程別入試類型ごとの該当学生全員の平均得点を算出した。次に年度ごと及び課程ごとに順位をつけた。ここでは年度や課程により入試類型の順位の高低のばらつきがあり、判断がつかなかったため、さらにその順位ポイントを合計し、学科・課程数で平均を出した。それが表 1 である。その結果より、ダビンチ入試合格者の成績が必ずしも一般入試より悪いという結果にならなかった。

次に入試類型ごとの単位取得数を比較した。検証の手順は、学部卒業年度の 4 年生後期までに取得した単位数を基に平成 14～23 年度の 10 年間分の学科・課程別入試類型ごとの該当学生全員の平均取得単位数を算出した。次に先ほど同様に、年度ごと及び課程ごと

表 1. 入試類型別 成績の順位の平均

	ダビンチ	前期	後期
2002年度生	2.2	1.6	1.5
2003年度生	1.9	1.9	1.5
2004年度生	1.9	1.8	1.6
2005年度生	1.7	1.9	1.6
2006年度生	2.1	1.8	1.5
2007年度生	2.0	1.8	1.6
2008年度生	1.6	1.9	1.9
2009年度生	2.0	1.6	1.8
2010年度生	2.2	1.8	1.4
2011年度生	1.8	2.1	1.5

に順位をつけた。ここでも、年度や課程により入試類型の順位の高低のばらつきがあったので、その順位ポイントを合計し、学科・課程数で平均を出した。それが表 2 である。その結果より、ダビンチ入試合格者の単位取得数は、一般入試合格者より多いことが明らかになった。

表 2. 入試類型別 単位取得数の順位の平均

	ダビンチ	前期	後期
2002年度生	1.4	2.3	1.5
2003年度生	1.3	2.2	1.8
2004年度生	1.6	2.1	1.6
2005年度生	1.4	2.0	1.8
2006年度生	1.9	1.8	1.7
2007年度生	1.8	1.8	1.8
2008年度生	1.5	2.0	1.7
2009年度生	1.5	1.9	2.0
2010年度生	1.8	2.0	1.6
2011年度生	1.5	2.0	1.9

3.3 ドロップアウト予備群対象者の発生率と学習行動特性

成績も単位取得数も不足していて 4 年間での卒業が難しいと考えられる学生群を「ドロップアウト予備群」とする。入試類型によりそのドロップアウト予備群の発生率に違いはあるのかについて検証した。検証の手順は、1 年後期までの期末テストの成績と単位取得数が 30 以下の学生数を計測した。一般入試でのドロップアウト予備群の対象者は 140 名、ダビンチ入試は 5 名であった。これに各入試の入学者総数⁸で割合を出すと、一般入試が 4.8%、ダビンチ入試が 2.0%であり、高大トランジション期においては、ダビンチ入試合格者の方が一般入試の合格者よりドロップアウト率が低い結果となった。

次に、入学時の学習行動特性を入試類型ごとに比較した。比較には入学時に取得する新入生アンケートの回答結果を利用する。アンケート項目は、全 37 問の設問で行っているが、ここでは、その中の学習行動特性に関する項目を抽出した。アンケートの集計は平成 25～27 年度新入生までの 1,846 名を対象とする。

「調査・研究手法」では、高校時代の授業の中で項目にある経験をどのくらいしたかを尋ね、実施率を表3⁹で示した。全ての項目で、ダビンチ入試合格生が他のタイプの合格生より多く経験している結果となった。特に、インターネット利用、調べたことを図・表にまとめる、文章にまとめるといった経験の実施率が高いことがわかった。

表3. 高校時代に体験した学習法 (%)

	入試型		
	ダビンチ	前期	後期
図書館利用	18	15	13
インターネット利用	50	43	40
友達と話し合い	35	29	29
図・表にまとめる	29	16	18
文章にまとめる	34	20	23
発表資料にまとめる	27	17	18
人前で発表	33	22	25

次に表4¹⁰は大学教育に対する選好の結果をまとめている。他の入試タイプの差が5ポイント以上開いている項目を中心にみる。まず、AO入試合格生は、単位を取るのが難しくても興味ある授業(項目A)がよく、講義より演習形式(項目D)を好む。将来目標をもって講義を受け(項目H)、教員とは授業以外でも積極的に交流する(項目I)方がいいという選好を示している。前期日程合格生は、専門知識や技術の習得(項目E)

表4. 大学教育に対する選好の状況 (%)

	入試型					
	AO		前期		後期	
Q-A	単位が楽に取れる授業	興味ある授業	単位が楽に取れる授業	興味ある授業	単位が楽に取れる授業	興味ある授業
	9	91	22	78	19	81
Q-B	出席・平常点重視	試験・レポート重視	出席・平常点重視	試験・レポート重視	出席・平常点重視	試験・レポート重視
	66	34	67	33	57	43
Q-C	1.基礎・基本的な授業	2.応用・発展的な授業	1.基礎・基本的な授業	2.応用・発展的な授業	1.基礎・基本的な授業	2.応用・発展的な授業
	75	25	74	26	58	42
Q-D	講義形式の授業	演習形式の授業	講義形式の授業	演習形式の授業	講義形式の授業	演習形式の授業
	63	37	81	19	82	18
Q-E	幅広い知識/技能の習得	専門知識/技能の習得	幅広い知識/技能の習得	専門知識/技能の習得	幅広い知識/技能の習得	専門知識/技能の習得
	68	32	62	38	67	33
Q-F	系統立った履修	自由な選択履修	系統立った履修	自由な選択履修	系統立った履修	自由な選択履修
	51	49	57	43	54	46
Q-G	授業で指導をうける	自分で工夫する	授業で指導をうける	自分で工夫する	授業で指導をうける	自分で工夫する
	32	68	40	60	34	66
Q-H	将来を決めて受ける	受けて将来を決める	将来を決めて受ける	受けて将来を決める	将来を決めて受ける	受けて将来を決める
	52	48	39	61	36	64
Q-I	教員と積極的に交流	必要以上にならない	教員と積極的に交流	必要以上にならない	教員と積極的に交流	必要以上にならない
	92	8	86	14	80	20
Q-J	教員が指導	学生の自主性	教員が指導	学生の自主性	教員が指導	学生の自主性
	13	87	11	89	9	91

への関心が他の入試タイプより高く、学習方法は授業で指導を受けたい(項目G)学生が他の入試タイプより多い結果となった。後期日程合格生は、出席や平常点より試験やレポート等の一発で成績を決める(項目B)方を好み、基礎よりも応用発展的な授業(項目C)を好んでいる。また先生との交流(項目I)も必要以上にいないという人が他の入試タイプより多いことがわかった。

3.5 入学前教育の検証

ダビンチプログラムで行っている入学前教育の状況を検証する。

3.5.1 入学前学習(添削課題)の提出率

まず、入学前学習(添削課題)の状況を見る。入学前学習が全員参加で行っており、4教科×3回の提出結果は表5¹¹のようになる。提出率は2012年度から95%を越え、現在ではほぼ100%の提出率となっている。

表5. 入学前学習(添削課題)の提出率

2008年度生	2009年度生	2010年度生	2011年度生	2012年度生
94.0%	91.8%	91.0%	94.1%	96.2%
2013年度生	2014年度生	2015年度生	2016年度生	
99.1%	99.1%	98.1%	99.1%	

3.5.2 学習・生活相談会の実施状況

学習・生活相談会¹²は、最終合格発表から入学式までの期間に行っているスクーリングである。内容は、入学前学習提供科目の講義、添削担当からの学習方法や解法のアドバイス、在学生スタッフによるマンツーマンの解き方指導と交流会である。ダビンチ入試合格者は、これまで北は北海道、南は沖縄まで存在しており、その合格者の参加率は表6のようになる。

表6. 学習・生活相談会の参加率(地域)

	京都	関西 (京都を除く)	関西以外	全体参加率
2009年度生				9%
2010年度生	46%	28%	1%	33%
2011年度生	54%	37%	36%	47%
2012年度生	68%	62%	60%	64%
2013年度生	82%	67%	50%	66%
2014年度生	75%	82%	75%	79%
2015年度生	82%	78%	67%	78%
2016年度生	99%	95%	53%	94%

この結果より、全体参加率は2009年度生の9%から2016年度生94%まで上昇し、中でも京都府内の参加率が99%にまで上昇している。さらに京都府を除く関西エリアの参加率も95%に上昇している。しかし、関西以外の参加率は、2014年度の75%が最高となり、以降では下降していることがわかる。京都および関西エリアでは、2015年度を除いてほぼ順調に参加率が上昇していることから、大学所在地を核にして入学前

教育の実施の認知が積み上がり、それが参加率に繋がっていることが考えられる。

また表7のように参加回数もここ数年で上昇している。2016年度生の時には全回出席率が大きく伸び90%近くにまで及んだ。これは、ダビンチ入試合格者56名中10名が地域枠¹³で合格しており、その合格者は全員京都府在住であるため、出席率が上昇している。

表7. 学習・生活相談会の参加率(回数)

	2010年度生	2011年度生	2012年度生	2013年度生
全回出席率	8.6%	25.4%	52.5%	43.3%
1回以上	62.1%	69.5%	84.7%	86.7%
	2014年度生	2015年度生	2016年度生	2017年度生
全回出席率	65.6%	50.8%	88.7%	80.7%
1回以上	96.7%	93.4%	96.2%	100.0%

3.5.3 学習・生活相談会と入学前教育の役立ち感

以上のように学習・生活相談会の参加率は上昇しているが、参加者はどのような感想をもっているのだろうか。参加後のアンケートで所感を聞いた。そこでは、①直接先生から勉強方法を聞き、自分の学習プランができた。②課題に取り組んで、さらに講義を受けて苦手分野の克服ができ、高校時代の科目のいい復習にもなった。③先輩学生から講義や大学生活のことを事前に聞くことで大学生活の不安が解消できた。④他の合格者の意識の高さやダビンチ通信でたるみがちな生活が引き締まる情報提供、非常に丁寧な添削、および学習会での先輩のアドバイスで大学の講義が楽しみになった、モチベーションが上がったという声があった。

さらに入学前教育を今後も行うことについて尋ねた結果、表8のように90%以上の参加者が入学前教育を「今後も行ったほうが良い」と回答している。

表8. 入学前教育を今後も「行ったほうが良い」と回答した割合

2008年度生	2009年度生	2010年度生	2011年度生	2012年度生
98.3%	98.5%	94.8%	96.6%	100.0%
2013年度生	2014年度生	2015年度生	2016年度生	
93.2%	95.1%	98.4%	98.1%	

3.6 ダビンチ入試の検証

ダビンチ入試は、教育的入試を目指して作問作りを行ってきた。そのコンセプトは「受けてよかった入試」で、定義は「ダビンチ入試を受験することで、かれらが自分を見つめなおして、自分のビジョンを描く。高校までに学んできた知識のネットワークに新しい知識を組み入れ、それが化学反応を起こすことを体験させる。単一の正答を覚える学習ではなく、知識を活用し、表現する学びを体験する。そういう学びが愉快地

なる入試。また、これらの大学の教育を先に体験することで、不合格になっても進学モチベーションを下げない入試」である。実際にダビンチ入試を受験した受験生たちはどのような感想をもっているだろうか。ダビンチ入試合格後にフリーアンサーで尋ねている。2010～2015年までのアンケート¹⁴の結果では、大きく3つの感想が書かれていた。一つ目は、一般入試との違いである。例えば、以下のような回答があった。

・大学の講義を受けて、その内容から試験問題が出される、というユニークな試験は、普通の学力試験でははかれないようなことをはかっているように思えて、良い経験になりました。

・新しく得た知識を利用して、問題を解くという点で、他の試験と比較してユニークだと思った。

・試験中に新しい考え方をつきつけられ、新鮮な経験ができた。

二つ目は、ダビンチ入試受験で大学教育に興味をもった、大学生になりたいと思ったという感想である。

・模擬授業は今までの授業とは違い、自分が学びたい分野のものであったので、より大学への入学願望を強く持つことができた。

・実際に大学の講義を聞くことができ、高校で学んだ知識を組み合わせ、さらに専門的な学習を展開させることができるのだと、実感することができた。

・大学ではこんなおもしろいことが学べるのだとワクワクした。

三つ目は、この試験を受けて自分は成長したと感じたという感想である。

・好奇心を刺激される試験内容に、満足した。合否に関わらず、良い経験をしたと感じられた。

・講義の内容も大変興味深い内容で単純に知的好奇心がわくようなものであったので印象に残りました。つまり、勉強になるものであったのが私の印象です。

・受験生全員独特の意見を持っていて、非常に感心できる発言も多々あり、すごく刺激的で素晴らしい時間を過ごせた。

ここに示したのは合格者たちの声であるが、不合格者たちはどのような感想を持ったのか。不合格者たちにランダム抽出で受験後の感想を聞いてみた。すると、以下のような感想を得ることができた。

・ダビンチ入試での経験からこの大学に進学したいと強く思えるようになったので、工織に絶対受かってやろうという思いが以前より一層強くなりました

・試験を受けてみて、将来と大学での学びがつながって必ずこの大学に合格したいと思った。

いずれも、ダビンチ入試の受験を肯定的にとらえ、その後の自分の成長につなげる姿勢が見える。ここから先述したように、不合格になっても進学モチベーションを下げず、さらに意欲的に志望校に挑戦する姿勢を醸成する機能がダビンチ入試の中にあるようである。

4 ダビンチプログラムの成果と高大トランジションの達成状況

ここまでの結果を利用して、ダビンチ入試における高大トランジションの状況を検証する。AO入試合格者の学力問題についてダビンチ入試合格者の場合、プレースメントテストの結果推移により導入当初より上昇している。さらに入試類型別に4年次後期時点での成績と単位取得数で比較すると、ダビンチ入試合格者の成績が一般入試合格者の成績と遜色なく、一部の課程ではダビンチ入試合格者の成績が良いことが判明した。加えて単位取得数がダビンチ入試合格者の方が一般入試合格者より多いこと、ドロップアウト予備群の発生率も一般入試合格者より少ないことがわかった。

次に知識偏重型の入試対策学習への対処の課題である。ダビンチ入試は高校教育課程の学習成果だけでなく、大学での学業遂行能力をストレートに見る入試の形態を採っている。受験生たちは、試験で得た新しい知識を利用して回答せねばならず、考察・表現力、実験を通しての論理構成力等の測定に対して通常の一般入試とのちがいを感じている。普通の学習姿勢と自立型学習力と学習成果は、従来の受験に動機付けられた学力ではなく、高校での授業そのものの学習姿勢に深く関係するものであり、ダビンチ入試がいかに高校の授業を重要視しているかを示している。

三つ目の早期合格者への対応の課題である。ダビンチ入試合格者の入学前教育では、入学前学習の添削課題提出率が100%近くに及び、学習・生活相談会の参加率も90%以上となっている。3回とも参加する割合は、最近2年で70%を超える。遠方の合格者以外は、ほぼ全員が全回参加し、東北や沖縄であっても、わざわざ参加する合格者が存在する。また、学習・生活相談会では、自分の学習プランができた、高校時代の科目の復習や苦手克服ができた、大学生活の不安の解消になった、他の合格者からの刺激でモチベーションが上がったという理由で、後輩たちに薦めたい事業として100%近い指示を得ている。これらの状況から、ダビンチ入試の合格者は、入学前教育に積極的に取り組み、成果を上げていると考えられる。

その他にも、ダビンチプログラムの成果が判明した。一つは、ダビンチ入試合格者の学習行動特性である。一般入試の合格者と比べて、調査・研究手法の経験が多いことが判明した。また大学教育に対する選好状況では、関心ある分野に対して目標に向かって自立的に学習する姿勢をもち、実践的な演習を好み、教員とのコミュニケーションに対しても積極的であるところから主体的かつ意欲やモチベーションを強く持っている

ことが考えられる。

次に、ダビンチ入試受験者は、ダビンチ入試を体験して大学での教育に興味を持った、大学生になりたいと思ったと回答している。大学教育への憧憬を増幅させ、合格者にとっても不合格者にとっても向学心を醸成する機能が備わった入試であり、「教育的入試」というダビンチ入試の狙いに合致している。また、この受験で自分は成長したと感じている。出願書類は大学進学の意味を迫及する必要がある、そこから大学での学びについて主体性を持つようになる。また、大学での講義を体験し、高校とは違う次元の学びを経験する。これらの要素で成長を実感させるものにつながったようである。

以上の成果と課題から、ダビンチプログラムは高大トランジション構造のどこに位置するか考えたい。ダビンチ入試はすでに「ふるう」段階の設計をしていない。ダビンチ入試は、「つなぐ」機能をもち、さらに(教育的入試)の展開から「変える」機能も有していると考えられる。また、入学前教育も、「つなぐ」機能と、大学生に変身「変える」機能を有していると考えられるが、まだ、図1の「つなぐ」と「変える」の中間に位置していると捉えている。

今後は高大トランジションを入試と教育活動で実現するために、新たなプログラムを計画する。その手始めにダビンチ入試とダビンチカレッジディネス活動を合体して新たな「ダビンチプログラム」を展開する。ダビンチ入試は、より主体的な学習において身に付けた思考力や学習スキルを注視し、ダビンチカレッジディネス活動では、一般入試の合格者より半歩先行く大学生への変身を目指し、大学教育への導入を意識した活動内容を企図する。

注

- 1 中央教育審議会(2014)「新しい時代にふさわしい 高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体改革について」
- 2 左巻健男・大島知之(2004)「多様なスクーリングプログラムによるダビンチ(AO)入試と入学前学習」『大学入試研究ジャーナル』No.14, pp.79-83 より引用
- 3 『アドミッションセンター年報』第1号「第3章入学前教育」p.41 より引用
- 4 中村高康(2010)「ユニバーサル化の課題としての「高大接続」『大学への進学 選抜と接続』, pp.286-289,玉川大学出版会
- 5 荒井克弘(1998)「高校と大学の接続—ユニバーサル

- 化の課題』『高等教育研究』第1集,pp.179-196, 日本高等教育学会
- 荒井克弘編著(2000)『学生は高校で何を学んでくるのか』,大学入試センター研究開発部
- 荒井克弘(2002)「大学進学ユニバーサル化と高大接続」『東北大学大学教育研究センター年報』第9号,pp.1-10,東北大学 大学教育研究センター
- 荒井克弘・橋本昭彦編著(2005)『高校と大学の接続—入試選抜から教育接続へ—』,玉川大学出版部
- 6 山田礼子(2000)「アメリカの高等教育機関における導入教育の意味—学生の変容との関連から—」『大学論集』32,pp.129-144,広島大学・大学教育研究センター
- 山田礼子(2001)「ユニバーサル化時代における導入教育の意味—4年制大学学部長調査の結果から—」『高等教育研究叢書』3,関西国際大学高等教育研究所
- 山田礼子(2003)「アメリカの一年次教育の構造—2002年度4年制大学調査から—」『大学と教育』37,pp.4-28
- 山田礼子(2004)「初年次支援プログラムの構築とフレッシュマン・セミナー」『学士課程教育の改革』,pp.200-219,東信堂
- 山田礼子(2005)『一年次(導入)教育の日米比較』,東信堂
- 山田礼子(2007)「日本版初年次教育構築のために」『初年次教育：歴史・理論・実践と世界の動向』,pp.57-67,丸善
- 7 成績の平均の分母を学科・課程ごとに設定しているのは、その単位での教育展開がなされているため、学年全体での入試類型の成績平均は無意味だと判断したことが理由である。
- 8 一般入試の入学者総数は2,925名、AO入試の入学者総数は232名である。
- 9 ベネッセ教育研究開発センター(2009)『大学生の学習・生活実態調査報告書』,p.35 より設問引用。
- 10 ベネッセ教育研究開発センター(2009)『大学生の学習・生活実態調査報告書』,p.83 より設問引用。
- 11 入学前学習(添削課題)は導入当初、参加自由としていたが、2008年度から本格的に導入し、全員参加となった。また、データは昼間部を利用。2016年度から夜間部を廃止し創設した地域TECHプログラムコースは除外している。
- 12 学習・生活相談会は2010年に再編して実施。それまでは、年度1回しか実施されていない。
- 13 2016年度入試より導入した「地域TECHプログラムコース」は、ダビンチ入試を実施している。募集は、誰でも受験することができる一般枠と京

都府北部地域に所在する高校出身者限定の地域枠がある。

- 14 ダビンチ入試合格者アンケートより。2010~2016年までn=358名の回答を得ている。

参考文献

- ベネッセ教育研究開発センター(2009)『大学生の学習・生活実態調査報告書』
- 堀野緑・市川伸一・奈須正裕(1990)「基本的学習観の測定の試み:失敗に対する柔軟的態度と思考過程の重視」『教育情報研究:日本教育情報学会学会誌』日本教育情報学会,6(2),3-7
- 左巻健男・大島知之(2004)「多様なスクーリングプログラムによるダビンチ(AO)入試と入学前学習」『大学入試研究ジャーナル』14, 79-83
- 内村浩・山本以和子(2012)「成績閲覧システムを利用した総合的學生支援—高大教育接続の改善をめざして—」『大学入試研究ジャーナル』22,119-126
- 内村浩,山本以和子(2013)「学びの接続」の視点からAO入試のデザインを考える—京都工芸繊維大学のダビンチ入試の場合—」『大学入試研究ジャーナル』23,1-5
- 植木理恵(2002)「高校生の学習観の構造」教育心理学研究,玉川大学出版会,50(3), 301-310
- 山田礼子(2000)「アメリカの高等教育機関における導入教育の意味—学生の変容との関連から—」『大学論集』,広島大学・大学教育研究センター, 32, 129-144
- 山本以和子(2011)「大学入学前後に必要な教育—入試接続から教育接続へ—」『アドミッションセンタージャーナル』,京都工芸繊維大学アドミッションセンター3, 1-6
- 山本以和子(2012)「アドミッション・プロセスと入学後の教育への準備」『看護展望』メヂカルフレンド社 37(13), 4-11
- 山本以和子(2016)「入学者選抜とレディネス開発の連携による高大トランジション達成に関する研究」
<http://repository.lib.kit.ac.jp/opac/repository/>